

平成 25 年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」（共同
利用型）成果報告

「露亜銀行の対中央アジア経営戦略—1910 年代のアルファルファ取引を中心に—」

塩谷哲史（筑波大学人文社会系助教）

本研究は、帝政末期ロシアの銀行資本による対中央アジア投資の実態解明に取り組んだ。
とりわけ、1910 年代に帝国内で最大の資産総額・預金額を誇った露亜銀行が、ロシア政府
が推進するロシア領トルキスタンの開発政策と軌を一にして、中央アジアの灌漑事業に投
資を計画しながら、商品作物の栽培と輸出を行ったことに注目した。

センター滞在中は、1910 年代の中央アジアの市況に関するデータを得られる『トルキス
タン通報』『トルキスタン地方新聞』などの定期刊行物を閲覧し、帝政末期ロシアの帝国
政府と有力銀行、企業家との関係に関する先行研究と *Central Asian Survey* など学術雑誌
に最近掲載された関連論文を収集、分析した。これらの作業を通して、鉄道網の発達と人・
資本の移動の活発化、大規模な外資の流入といった銀行資本の対中央アジア投資を促進さ
せる背景要素が整いながらも、商品作物栽培を目的とした農園設立計画を紛争解決に最大
限利用しようとする現地政権の動き、帝国中央政府による法整備の遅れ、1914 年夏に始ま
った第一次世界大戦による動員などが、さらなる投資の発展を阻害していたことが分かっ
てきた。

本研究プロジェクトの期間中に、その成果を含むものとして、ブリル社刊行の論文集の
分担執筆をした（“Who Should Manage the Water of the Amu Darya?: Controversy over Irrigation
Concessions between Russia and Khiva, 1913–1914,” P. Sartori (ed.), *Explorations in the Social
History of Modern Central Asia (19th–Early 20th Century)*, Leiden: Brill, August 2013, pp.
111–136）。また露亜銀行の綿花、アルファルファ栽培を目的とした農園設立計画について
触れた著書（『中央アジア灌漑史序説—ラウザーン運河とヒヴァ・ハン国の興亡—』風響
社、2014 年 2 月）を刊行することができた。

センター滞在中は、図書室およびセンター事務室の方々に様々な面でご助力を賜った。
ここに深く謝意を表したい。